

米欧亜回覧

第91号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

新しい展開、次々と始まる 「新・群像」シリーズ、タイアップ企画など

大プロジェクト

「倉使節団の新・群像」シリーズ、スタート

直近の一二月一三日には、歴史部会の担当で、かねてより準備がすすめられていた「岩倉使節団の新・群像」シリーズがスタートした。

第一回は、大蔵省や文部省の随員から、富田命保、若山儀一、吉雄永昌、今村和郎の四人が取り上げられ、富田兼任、三須隆弥、小野博正、吉原重和氏から、それぞれ発表があった。



富田命保



富田命保日記 (見開き全92ページ)の1ページ目

(詳細は二頁)



大画面で使節団の旅を追体験
12月8日(日)築地
(株)アクア ショールーム

新タイアップ企画、 「岩倉使節団の旅を追体験する日曜日」開催

一二月八日(日)、築地にある(株)アクアのショールームで、同社の支援のもと、同社スタッフで「築地朝塾」の運営委員でもある富士絢子氏と泉三郎氏のタイアップ企画によるDVD「岩倉使節団の米欧回覧」全九章一挙上映会が開催された。

趣旨は、現役の若い世代にもっと岩倉使節団のことを知ってもらおうということであり、日曜日の午前10時半から

ランチ、コーヒープレークを挟んでの長丁場の一日となった。当会からも有志十数名が参加、旅の最後に意見交換の時間があり、特に若い現役世代からは全員の発言があり、大変新鮮であり有意義な会となった。

(詳細は二頁)

「Cafe」初めての地方開催、 地域の人々と交流する

一月一三日、茨城県久慈郡大子町のゲルト・クナッパギーラリーで「Cafe」が開催された。会員のゆうきよしなり氏が同所で個展を開催する機会に、「Cafe」初の地方公演を実現しようと企画した。

直前に台風一九号で久慈川が氾濫し、鉄橋が二つ落ちるなどの大災害に見舞われ、一時は開催が危ぶまれたが、二代目館長ウテ・クネツパーさんの決断で決行された。

(詳細は二・三頁)



茨城県大子町クナッパパー亭長屋門

NHKの番組「ファミリアーヒストリー」が面白い。著名人の祖先を辿っていく番組で、本人も知らない歴史、とりわけ意外な人とのつながりや成功や失敗の物語が伝ってきて、教科書で習った通り一遍のスケルトンのような近現代史が、にわかには肉付いて生々しく身近に感じられるようになるからだ。最近見た番組で印象的だったのは、仲代達也とさだまさしの祖先の話で、二人とも徴兵令によつて軍隊に駆り出され、有能なために中国の最前線でスパイもどきの仕事をしていたことだった。

四、五代前まで遡ってみませんか！ ファミリーヒストリーの魅力

泉 三郎

孫にあたるお二人から一次資料の肖像写真や日記の紹介があり、一四年政変時の関わりや早稲田大学の初代総長を務めた高田早苗との深い関係も分かった。また、若山儀一については、実証的な経済学者で多数の著書があることや国際結婚の草分けの一人でもあることがわかってきた。

総じていえば、少年時代の家族、親族。師弟の関係、青壮年時代の勉学や仕事関連の後輩との関係など、ひとつつながり、人間関係図は実に興味津々である。人の生涯がいかに人との縁によつて大きく左右されるかを痛感せしめるのである。

「岩倉使節団の群像」にもそれが見える。著名な主要人物についてはこれまでかなりのことが分かって来ているが、中堅どころの随員や書記官については来歴や実績がほとんど知られていなかった。このたびは、また歴史部会の大リサーチプログラムはそれにチャレンジするもので、初回の四人の人物の発表はまさに興味あるものだった。

とりわけ大蔵省随員の富田命保については、その子孫にあたるお二人から一次資料の肖像写真や日記の紹介があり、一四年政変時の関わりや早稲田大学の初代総長を務めた高田早苗との深い関係も分かった。また、若山儀一については、実証的な経済学者で多数の著書があることや国際結婚の草分けの一人でもあることがわかってきた。

大プロジェクト 歴史部会「岩倉使節団 の群像」、新シリーズ・スタート

歴史部会では三年後の岩倉使節団派遣一五〇周年記念企画として団員全て及び留学生、随員を含んだデータベースの構築を開始した。

毎回四〜五名の団員、随員、留学生達を取り上げて「岩倉使節団の群像」として合計一〇七名の人物論を数年かけて展開する予定でいる。

二月一三日には最初の部会を開催し、
富田命保(発表者…三須吉雄辰太郎)
(発表者…吉原)
若山儀一(発表者…栗明)



(若山義一)



(今村和郎)

今村和郎(発表者…小野)

の四名を発表している。一月の発表者は決定しているが二月以降は担当者が未だ

決まっていない。この人物を担当しても良いと思われる方は是非名乗りを上げて下さるようお願い申し上げます。

今後の年間予定は下記の通りである。()内は発表者

・一月二十七日(月)

久米邦武(小野)、安場保和(芳野)、中山信彬(吉原)、野村靖(栗明)、内海忠勝(小野)

・二月二十五日(火)

大蔵省…田中光頭(小野寺)、五辻安仲、阿部潜、沖探三、池田政懋

・三月三〇日(月)

随員、大蔵省総括

・四月 宮内庁…東久世通禧、村田新八、山田顕義、原田一、安藤太郎

・五月 文部省…田中不二麿、長与専斎、中島永元、内村公平

・六月 文部省総括+森有礼、近藤慎三

・七月 工部省…肥田為良、大島高任、瓜生震、川路寛堂、長野桂次郎

・八月 司法省…佐々木高行、岡内重俊、中野健明、平賀義質、長野文炳

・九月 工部省、司法省総括

・一〇月 後発参加…由利公正、岩見鑑造、長岡義之、河野敏謙、鶴田皓

・十一月 後発参加…岸良兼養、井上毅、益田克徳、沼間守一、川路利良

・一二月 高崎豊麿、安川繁成、西岡逾明、小室信夫、鈴木貫一
(吉原重和記)

新タイプアップ企画実施で 活発な発言と交流

岩倉使節団の旅を追体験し 若い人々と交流を深める

一二月八日(日)、築地のとあるスタジオに老若男女約二五名が集まり、「岩倉使節団」の旅を追体験する日曜日という催しが行われた。

米欧亜回覧の会泉三郎氏と(株)アクアの「築地朝塾」運営委員・富士絢子氏のタイアップ企画で、仕掛け人の両者の挨拶のあと早速回覧の旅に出発した。

「岩倉使節団の米欧回覧」DVDが、正面のワイドスクリーンに映し出され、いつも見慣れているはずの映像だったが、ワイドスクリーンの迫



追体験の後、若い人々と意見交換

力とナレータの親し気な声のせいで、自分自身がそのスクリーンの中にはまり込んだ錯覚を覚える。途中何度かの休憩と質問タイムを取りながら、延々と六時間、とうとう瀬戸内のきれいな夕日を眺めて帰国するまでを実感することができた。

若い人にとっては、学校の歴史教育でマイナーな扱いしか受けていない岩倉使節団の全容を知ることができたのは大変有意義であったと思われる。終了後の意見交換でも、国造りに奔走した明治の若い人たちの気骨に触れて、現在の自分たちの存在感を高める衝動に駆られたようだった。

米欧亜回覧の会員もあらためてDVD全九章を通して見たことで新しい発見があったとの感想が相次いだ。そして二次会の大衆酒場では若い人も老いた人も使節団の話題で盛り上がった。

日本は現在、明治維新と同じような社会の変革期を迎えていると思われる。先人の大いなる気概と功績を、今後の日本のかじ取りをする若い人たちに伝え知らしめることは、我々の重要な使命と実感した日曜日だ。大変実のあるイベントだったと感じた。継続的な開催ができると喜ばしい。
(政井寛記)



i-cafe第1部 畠山会員(左)のお話し

茨城県大子の古民家でi-cafe 地域の人々と交流盛況!

東京から新幹線で一時間、車でさらに一時間の遠隔地だが、泉代表以下一二名の会員が駆けつけ、地元参加者共々四〇人以上の賑やかな会になった。

会場は、一九七五年に大子に移り住んだドイツ人陶芸家がゲルト・クナツパー氏が、江戸時代末期の長屋門付き藁ぶき屋根古民家を修復した施設。長屋門にギャラリーを設け、i-cafeは広い庭の奥にある母屋で行われた。陶芸作品に囲まれ、大きな鉄瓶の架かった囲炉裏がある趣のある会場。ウテさんはゲルト氏の長女で、五年前の当会新年会に来てくれた方。

第一部では、DVD『岩倉使節団の米欧回覧』第一章「使節団の出発」を映した後、会員の畠山朔男氏が『岩

倉使節団に同行した五人の女子留学生」と題して、津田梅子、大山捨松、永井繁子を中心に、留学生派遣経緯、現地での勉強状況、帰国後の活躍ぶりを、パワーポイントを使っ使して丹念にお話。大山捨松が那須塩原駅近辺に住んでいたこともあり、大変興味深く聞いて頂けた。

第二部ミニコンサートでは、帰国後音楽取調掛の洋琴教授となり西洋音楽導入に努めた永井繁子が明治二二年六月華族会館の「音楽同好会」で日本初演したウエーバー「舞踏への勧誘」と、一六歳で通訳見習いとして岩倉使節団に加わり、全米の人気者となり「♪小柄でかわいいトミー、人妻も娘も夢中、日本から来たサムライ・トミー」と歌われた立石斧次郎の「トミー・ポルカ」を植木さんがピアノで演じた後、Gala Singersの畠山、岩崎の二人が、ジョン万次郎が日本に伝えたフォスターの『おおスザンナ』と『ケンタッキーの我が家』を披露した。

第三部交流会では、ウテさん手作りのホットワインで体を温め、囲炉裏に手足をかざしながら、地元の方々との話が弾んだ。シカゴの村井さんの紹介で水戸から駆けつけた鈴木祐志さんは、前田利嗣の随員として岩倉使節団に加わっ

た関澤明清が日本で初めて鯿の人工孵化を成功させたこと、その試験地が大子に近い那須や水戸だったことを語った。最後にみんなで『里の秋』を歌って、名残を惜しんだ。(文責 岩崎洋三)

アジア歴史資料センターインターネット特別展「岩倉使節団く海を越えた一五〇人の軌跡」の紹介

アジア歴史資料センターは国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センターのアジア歴史資料を電子化し公開している。また毎年テーマを決め「インターネット特別展」を配信している。

明治一五〇年にあたる平成三〇年は、岩倉使節団にスポットをあて、使節団の行程や現地での活動の詳細について、地図や年表で紹介。使節団一行に関する歴史資料などのコーナーから、詳細の資料の検索・閲覧もできる。さらに岩倉使節団に関する歴史的



明治150年インターネット特別展

背景やその影響などのコラムも提供している。記念プロジェクトチームでは、このインターネットミュージアムとの差別化や連携を検討している。ご意見を頂きたいので、「岩倉使節団インターネット特別展」でご検索下さい。(福島正和記)

米欧回覧実記
輪読会報告
英書(フルベッキ)輪読会報告



担当幹事
岩崎 洋三

■八月二一日 実記輪読会夏休み特集「教育現場における岩倉使節団の採り上げ状況」

実記輪読に代わり、広島県福山市駅家(きき)東小学校教務主任杉原進氏を招き、教育現場での岩倉使節団の採り上げ状況について講演頂き、意見交換を行った。杉原先生は、二〇一七年ご自身で初めて岩倉使節団をテーマに公開授業を行った。その際収集資料の中に泉理事長の「堂々たる日本人」もあった縁から、当会に連絡が入りDVDをお貸しする経緯となった。

一〇月に教師生活の集大成として、校区の研究授業で「岩倉使節団」模擬授業を計画されている処、意見交換を



杉原先生の講演 (8月21日)

目的に上京されることとなり当会合を企画した。当日は、塚本副理事長以下会員一四名が参加した。杉原先生より、経緯、授業内容の説明があり、模擬授業形式で、意見・感想等幅広く意見交換した。(富田兼任記)

夏休み特集続編

杉原先生から、一〇月七日の校区研究授業が大成成功だったと、作成した一〇〇コマを超えるパワーポイントや、児童の感想文、参観した先生方の評価、学級通信の特集号などを添えて詳細なご報告を頂いた。

児童が極めてまともな受け止め方をしてるのに驚かされる。また、先生方の評価も高く若い人たちへのアツピールを主要課題の一つにしている当会としても大変参考になる。(岩崎洋三記)

「校区研究授業・児童感想文まとめ」

四分の三にあたる一八人が感想や意見を記している。・鉄道や蒸気船や工場などの技術、政治の仕組みなどを真似した方がいい。

・外国と結んだ不平等条約の改正に失敗したこと。

・明治政府の中心人物を含めて百人以上が約二年間国を留守にした驚き、留守政府の人々、参加しなかった西郷隆盛への思い。

少数意見として、武器工場建設、ロシア海軍、法制度、地下鉄、エレベーターにびつくりの様子。日本は職人の手仕事、外国は機械、等。(中島由美記)

〔参観教師の感想まとめ〕

・児童の思考、疑問を引き出す資料構成、発問の仕方等教師の役割を再認識させられた

・「驚き」「ギモン」等児童を没頭させる授業の流れ、テンポが素晴らしい

・教材の深さ、情報量の多さを効果的に使い巧みにタイムスリップさせていた

・考え、予測、まとめ、意見交換と児童が主体的にPOCAを実践していた

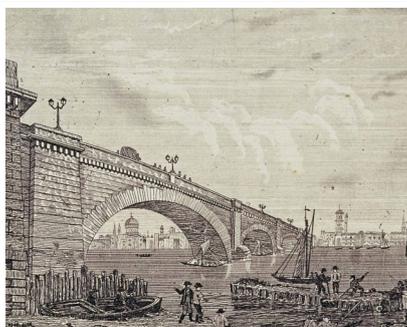
このような授業が日本国中の小学校で行われれば、若い世代への「岩倉使節団」の啓蒙に資すると強く感じた次第である。(富田兼任記)

■九月六日 実記輪読会 第二十一巻 「イギリス総説」 (富田兼任)

イギリス回覧を始めるにあたり、イギリスを総括説明。国名は大ブリテン・アイルランド連合王国。一九二二年にアイルランド(北アイルランド)分離。イングランドはアングロ人とサクソン人が祖先の、アングロサクソンが住み・ウエールズ・スコットランドに土着のケルト(Celt)人を追いやった。

当時のイギリスは、インド・オーストリア・カナダの他、ジブラルタル、マルタ、アデン、シンガポール、香港、パナマを支配する大英帝国の時代。石炭採掘高・銑鉄生産高は共に世界全体の約六割を占め、まさに世界一の工業国、貿易国であった。

道路はほぼ舗装・運河(2000km)・鉄道(2万km)と交通網も発達していた。文献によれば、一八五一年



ロンドン橋 (『実記』第22章)

のロンドン万国博覧会から七年の「世界大不況」までの時期はイギリス近代史上「繁栄の時代」とよばれたとある。その真つ只中の時に使節団は訪英したことになる。その後九六年まで続く大不況の時代を通じ、「世界の工場」から「世界の銀行家」「世界の手形交換所」に変身を遂げ、今日の「シティー」の基礎が作られた。果たしてブレグジットでこの地位はどうなるのであろうか?

■十月八日 実記輪読会 第二十二巻 「ロンドン市総説」(富田兼任)

明治五年七月一三日(1872.8.16)アイルランド・クイーンズタウン港着、少時停泊後出発、翌一四日リバプールにて上陸後汽車にてロンドンに向かい、夜一時過ぎユーストン駅着、馬車にて宿舍の「バッキンガムパレスホテル」に向かった。

ロンドンには2000年前ローマ軍占領時代の「ロンデニウム(沼地、荒れた土地)」が発祥。今も金融の中心である「シテイ・オブ・ロンドン」の辺りにその足跡を残す。西から東にチームズ川が流れ、最下流(東端)の「ロンドン橋」から「バツテラシー橋」まで九つの橋が架かっている。 「ロンドン橋」の下流に当たる「タワーブリッジ」は

使節団訪問時はまだ無かった。 ウェストミンスター寺院、セントポール寺院、バッキンガム宮殿、ハイドパーク、リージエントパーク等市内の名所を紹介、産業、人口、建物、交通(鉄道・乗合馬車)等を説明。なお、当時地下鉄は既に運行していたが、蒸気機関車牽引なので乗客は煤だらけになった、という。

■十一月二〇日 実記輪読会 第二三巻 「倫敦府の記上」 (遠藤藍子)

七月一六日 外務宰相ロートグラウンウェル宅訪問。ヴィクトリア女王はスコットランドの離宮に滞在中のため使節団は待つことに決定、宰相宅のディナー待ちの間、ケンシントンの博物館を見学。
・一七日 駐日公使ハリパーキスの誘いでブライトン(サセックス州の避暑地)へ。ロンドン市長が来訪。
・二三日 パークス、アレクサンダーの接待で汽車でグランドフォードへ。北白川宮、伏見宮が同行。
・二四日 ブランドフォードで大演習見学後、ポーツマス市(英国海軍本拠地)へ。
・二五日 マウンディ提督の官邸を訪問。昼食の接待を受ける。その後、デュークオブウェリントン号(海軍練習船)に乗船し人造石材製作現

場(奴隷が従事)や造船所のドック建設を見学。新発明の甲鉄艦(回転砲台を備えた砲艦)が砲撃実験で全くの無傷であったことからイギリスの海軍力に感服。
・二六日 港内係留の「記念艦ヴィクトリー号」(トラファルガー海戦の旗艦船)見学。提督ネルソンの遺品を見物しネルソンの鋭気を感じる。②ランチで「ミノートル号」(装甲船)、「ハーキュリーズ号」(甲装艦) 見物。ノートン(港口の砲台) 見物。
・二七日 陸軍の訓練、司令官宅で昼食、兵營を一巡。
・二八日 リーゼントパーク西北の動物園へ。園内の設備、飼育環境、生き物の生態、生育地を細かく記述。購入費用の準備や飼育技術の必要性、生育環境の整備を記載。人気は欧州一で、その飼育技術の優秀さや種類の多さはオランダの動物園と並ぶが、猿類の豊富さと園内の森や泉の完備の点で勝るといふ。

□九月六日 フルベッキ輪読会 Ch. V. In Nagasaki: First Impression Page 80~99(栗明純生)

フルベッキの来日(1859.11.17)から当初の赴任地、長崎での生活の記録である。
・長崎への入港(11.17) 初日の夜の美しい光景の感動的な描写と、新天地での期待でこ

の章は始まる。
・二人の宣教師が加わり、家捜しの苦勞、新居の家づくり、大工・左官らの仕事ぶり、彼らが口にするブリキ、アンドン、ビードロなどの外来語を聞き留めて楽しんだ。
・12.29には妻が来日、新しい伝道の誕生を喜んでる。
・日本人使用者への当初の低評価と当時の使用者の雇用事情。日本人の道徳事情、特に自ら体験した、当時の女性を困うことに対する寛容さへに對して強く憤慨、批判。
・キリスト教によりこれらの弊害が除去され、伝道が成功するのであろうと確信。

・日本の食糧事情、魚の種類が多さ、肉、野菜の豊富さやパン屋の焼くパンやケーキが美味しいこと。
・長崎は大都市であり人の眼につきにくいため伝道活動をしやすいだろうと観測。
・長崎に先住しているオランダ人の存在や影響力は海外で思われているほど大きくなく、自分の伝道にたいして障害とはならないだろう。
・第一子誕生の歓喜と二週間後の悲痛な死、日本語習得の難しさ、日本語学習の様子。

・長崎での当時のキリスト教の礼拝事情とフルベッキの知名度の向上。江戸におけるヒュースケン暗殺の報とそれによる外国使節の横浜移駐。

・日本の急速な西洋文明の吸収に対する賛辞と布教の難しさに関する悲鳴、丘の上の見晴らしのいい家への引越しと日本の治安(盗難)事情。
 ・日本の投獄システムの急速な近代化―中国方式から西洋化(近代化)へ―かつての拷問に関するエピソード(個人的体験)とキリスト教徒の密告に関する高札の紹介。
 ・第二子の誕生と伝染病に関する歴史と当時の対策の悲惨な状況の説明と、西洋医学の漢方医に対して優勢となりつつある状況と、キリスト教の最終的優越への予想。
 ・彼が尊敬を集めた要因―「知識は力なり」と「真実は強く、勝利する」に関する―についての言及と、真実の探求者はフルベッキを発見し、彼の生徒となるのだ。
 □一〇月八日フルベッキ輪読会 Ch.VI Political Appheaval (政治の激動)pp.100-114 (岩崎洋三)

長崎には遅まきながら居留地が整備されていたが、フルベッキは居留地外に住み続けていたため、懇意にしていた長崎港警備担当の佐賀藩家老村田若狭守から避難を勧告され、まずは居留地へ、その後上海へと避難した。
 同地に四カ月滞在の間、米国長老教会印刷所美華書館のガンブルから活版印刷を学んだ。これが後に長崎で本木昌造がガンブルから活字鑄造や組版の講習を受け、日本における西洋活版術の始まりとなった。フルベッキは美華書館の出版する漢訳西洋書物の輸入頒布の役も担っていた。
 なお、村田若狭守は聖書に大変興味を持ち、義弟綾部幸照と家来本木昌造をフルベッキに差し向け聖書を学ばせた。村田と綾部は一八六六年五月にフルベッキから洗礼を受けたが、前年に日本最初の受洗者になった矢野隆山に次ぐものだった。
 □一月二〇日・二月一日フルベッキ輪読会 Ch.VII The Doors Opening, p.115-141 (大森東亜)

四カ国(英・仏・蘭・亜)連合艦隊下関砲撃事件を通して天皇を戴いた勢力が政権を担い、敵対者は反逆者となる仕組みを幕府と長州との内戦により知る一方、中世の暗い制度下であり、戦争は悲惨であるが戦いなしで難局を克服するのは困難だと見る。
 この動乱期にフルベッキが信頼できる人物であることが知られ全国から人々が情報と書籍を求めてやって来る。フルベッキは訪問者に喜んでもらうべく真摯な応接に努める。若き時代に修得した工学技術の知識を提供する一方、来訪者の様々の情報を選別し本国の本部に報告する。
 若者に英語およびオランダ語のほか数学、測量、物理学、化学、兵学等を教え、技術者で語学ができる者が大変役立つことを自覚する。時に肥後藩からの蒸気船購入の斡旋に応えらるとともに各藩からの招きも受ける。長崎奉行の設置した長崎洋学所の英語教師委嘱を受け、自活する宣教師となる。横井小楠の甥二人の留学斡旋を手始めに多数の留学生を米改革派教会を通してアメリカに送り出す。また、佐賀藩士大隈重信や副島種臣らには新約聖書とアメリカ憲法を教える。
 佐賀藩家老の真剣な聖書知識の求めに三年も応じた後、

藩士二名に洗礼を行い本来の宣教師としての役割を初めて果す。この間フルベッキの派遣母体がアメリカ改革派教会に名称変更したことへの賛意と日本のカトリック活動への所感と併せ、長崎では宣教活動を表立って行えなかった実情が語られる。また門下生の僧侶が江戸でキリスト教誹謗の小冊子を刊行したことに大変苦慮した。
 長崎での活動を振り返り、自身と家族の安全のため上海への一時避難もあり、一般の暴動の恐れのある時は拳銃に弾丸を装填したが、個人的暴力の危険はなかったと語る。人々の信頼を得ることが日本人語を習得することが肝要なほか、人々との交際ではキリスト信徒の義務をはたしていくことと親切と寛容を示すことが求められていると記す。

歴史部会報告



担当幹事
小野 博正

■九月三〇日「日本の国境はどう画定して来たのか」(小野博正)
 領土は世界六〇位だが、排他的経済水域(EEZ)で見れば、世界第六位で熱帯から亜寒帯までの地域を包括する世界でも珍しい自然環境に恵まれた国である。
 北方領土、尖閣列島、竹島など近隣諸国との国境問題を抱えているが、いったい、日本の国境は何時、いかようにして確定されたのか。江戸時代の初期には、蝦夷(北海道)も琉球(沖縄)も、更には小笠原諸島(無人島)も日本地図にはなかった。
 領土に対する目覚めは、一七九二年ロシアのエカテリーナ二世の書状を携えた使節のラクスマンの根室来航に始まる。一七八九年のフランス革命は、世界中に国民国家の意識を目覚めさせ、どの国家も国境画定の必要性が生じていた。一方で、日本近海は格好の捕鯨海域で、操業する欧米船から薪水食糧供与を求め、幕末には開国交易を要求する使節の来航が頻発した。
 蝦夷地は自由の土地で、一六〇四年徳川家康は、松前慶広の求めに応じてアイヌとの独占交易権を与えたが、日本領土の意識は薄かった。しかし、度重なる欧米船来航に対処して、近藤重蔵、最上徳内の択捉島探査、伊能忠敬の測量、間宮林蔵の樺太調査、松浦武四郎の蝦夷地調査などの先人の努力があつて、一八七五年に榎本武揚(全権公使)による樺太・千島交換条約に

結実して、北海道(松浦命名)の日本領有と国境が画定する。(終戦直前の参戦で、四島がソ連により占拠・実効支配されて現在に至る)

琉球(沖縄)は、長い日清両属(清国と冊封関係で、一方薩摩藩に支配される)を経て、やはり欧米の干渉と交易要求があったが、幕府時代に実効支配を継続し、明治になつて新政府は、琉球漁民の台湾生蕃による殺害事件を奇貨として台湾出兵を強行し、台湾が清国所屬なら責任を取つて賠償せよと迫り、暗に琉球は日本の領土と民と交渉を進めて、一八七九年の琉球処分を経て、日本領土化を確定する。(敗戦で米国信託統治となり、一九七二年沖縄返還が実現するが、現在の沖縄基地問題は、戦後の日米安保条約と日米地位協定・秘密協定により基地の自由と制空権が実質奪われて現在に至る)

■一〇月二三日 「幕末維新时期米国人留学生研究のSWIETO研究の最前線(?)」
講師:塩崎智 拓殖大学外国語学部教授)

大学時代ギリシャのテサロニケに遊学し大学院時代は地中海考古学専攻、キプロス島青銅器時代の研究。
アメリカで一〇〇枚ほどの写真の調査を行った。日米の史料を活用してまとめた情報を、平凡社選書『アメリカ知日派の起源』として発表。この写真の調査中、プリンストン大学のシンポジウムで泉三郎氏に会い、その後も研究上、御世話になった。
幕末から一八七六年までに欧米に派遣された文部省貸費留学生が研究対象。「誰が、いつ、どこで、何を学んでいたのか」を検証する為にウイキペディアを見ると誤りが散見される。岩倉具定と吉原重俊の例を挙げられたので吉原がSWIETO大での状況を説明。各学校のSchool Catalogueが入手できれば、その学校で使用していたテキストが分かるので入手し、彼等の学びを追体験したい。
今後注目したい点は、留学生とキリスト教との関係である。留学先の市立アカデミー及びホームステイ先から受けたキリスト教の影響を調べたい。彼らが帰国後、日本に与

えた影響として、キリスト教が間接的に与えたものは何かを考へたい。また、その宗教的影響と彼らが与えた実学的影響も考へてみたいが、まずは、各留學生の留学中の事実の確認である。渡米日、帰国日、留学先とSWIETO、地元米国人との交流などについて史料を収集し、「幕末維新时期米国人留学生史料集成」をまとめることをライフワークにしている。

今後、回覧の会の協力も得たい。(文責 吉原重和)
■一二月二三日 「人物論1」
三年後の岩倉使節団派遣一五〇周年記念企画の初回として大蔵省関係者四名を取り上げた。
(一) 富田命保(発表者…三須)
一八六五年 横須賀製鉄所建設計画を進めるべく渡英。
一八七一年 岩倉使節団に渋沢栄一の推挙で田中光顕理事随行として参加。一八七五年紅茶の輸出を図るべく南保と渡英。一九二八年七七歳で死去、墓地は染井霊園。
富田日記については富田兼任氏が発表し、ワシントンでの行動や、大久保、伊藤の帰国に吉原と小松が同行との記載あり。
(二) 吉雄辰太郎(発表者…吉原)
長崎のオランダ通詞の家柄

に生まれ、田中光顕の随員として参加。給料の支給を行つた。富田日記には紙幣製造管理という役目を命ぜられニューヨークに滞在することとなり田中理事官随行の役を解かれたとある。紙幣印刷監督としてそのアメリカン・バンクノート・カンパニーに駐在。帰国後は大蔵省紙幣寮に出仕し一八七五年にフィラデルフィア博覧会視察のために渡米。一八九四年に死去。

(三) 若山儀一(発表者…栗明)
一八四〇年、江戸の旗本・医師・西川宗庵の子として生まれる。フルベッキに就いて経済学を学び田中光顕理事官の随行として渡米。一八七二年五月国租事務取調方として、大蔵代理事官心得を以て欧米諸国における研究を命ぜられ、一〇月、ニューヨークにおける紙幣並びに国債刊揚事務監督を命ぜられた。結局、帰国するまでの三年間、欧米で税務・財政の研究にあたる。彼は国際結婚をした。
明治二四年死去、五二歳。
(四) 今村和郎(発表者…小野)
土佐藩高岡村の豪商の長男として誕生。田中不二磨理事官随行として使節団に参加、役職は理事官随行・文部省中教授。条約改正交渉を始めた本隊から離れて、一八七二年

二月パリに入り、ジュネーヴ、ベルリン、サンクトペテルスブルグを回覧し帰国後ボアソナードと民法制定に尽力。明治二四年死去。
(文責・吉原重和)

グローバル
ジャパン研究会
報告

担当
三島 研一

■九月二二日 「イノベーション」
大園イスラエルとどう付き合うか」講師 塚本弘 日本イスラエル商工会議所会頭)
近年、イスラエルへの日本企業の進出が著しい。アメリカ企業は既に、著名な大企業がほとんどイスラエルに研究開発拠点を設置しており、イスラエルは、第二のシリコンバレーと呼ばれるほどだ。
なぜ、イスラエルはイノベーション大国になれたのか、五つの要因が挙げられる。
① 物怖じしない態度、粘り腰(ヘブライ語でフツパーと呼ばれる)
② 階層のない社会、どの人にもニックネーム
③ 軍隊経験、男性三六ヶ月・女性二一ヶ月、予備役あり、最優秀な人間を登用するSSS部隊
④ 失敗がマイナスにならない
⑤ イスラエルイノベーション Authorityによるスター

トアップ
「企業支援」
イスラエルのイノベーションの秘密を分析した本が「アップル、グーグル、マイクロソフトは、なぜ、イスラエル企業を欲しがっているのか？」(ダン・セノール、シャウル・シンゲル著)(訳者 宮本 喜一)だ。いくつかの興味深い事例が紹介されている。

ベター・プレイス・電池交換型電気自動車。ペレス元イスラエル大統領が猛烈にバックアップ。
フロード・サイエンス・金融詐欺のチェックスシステム。軍のテロリスト探索技術を応用。ペイバル社への売り込み
次に日本イスラエル商工会議所のイスラエル訪問(二〇一九年六月)について、パワーポイントで報告。各分野で失敗を恐れず、自信たっぷりなイスラエル企業の紹介。
これからの課題は、日本のイノベーションをどう進めるかだ。元東芝副社長の川西剛氏の「イスラエルの頭脳」を紹介したい。日本企業の弱点は、アイデアを潰す上司の存在だ。閃きの重要性。農耕社会DNAのため協調性重視の日本では、「天の時、地の利、人の和」。イスラエルでは、砂漠に囲まれ天の時も地の利も存在しない、個人が工夫するだけ。ただ、極端な個人主義を諫めるためユダヤ教の613の戒律がある。
日本人とユダヤ人の最大の違いは、誰もやらないことをやるかどうか。敗者復活戦を認めない日本社会を変えて行くことが大事。

岩倉使節団のメンバーであった田邊太一の長女花圃の夫である三宅雪嶺の子孫であり、米欧亜回覧の会には、大変親しみを感じており、お招きいただき、ありがたい。今年三月に早稲田大学を退任したが、一月に最終講義を行ったので、そのレジュメを使いながら、お話ししたい。
明治の先達は、海外の制度を日本に紹介する際、翻訳に苦勞をした。フランス語で、会社は、ソシエテといわれ、そのメンバーはアソシエと呼ばれる。そこには、人間が集まって組織を作るという概念がある。英語のカンパニーも非営利が前提になっていた。ところが、ここ三〇年ぐらいで、こうした会社の考え方が崩れてきた。株式会社は、ヒトが運営し、ヒトのために役立つものでなければならぬのに、今は、資本というモノが支配する世の中になってしまった。

高橋亀吉は一九三〇年に「株式会社亡国論」で、特にその場主義の大株主の横暴と貪婪(どんらん)なる高配当欲が、その事業を著しく衰退させていると批判している。株式会社制度において、株式という仕組みによって、均一な質な単位となる資本市場の形成が可能となったが、これにより、株主という人格ではなく、株式という財産権によって、意思決定がなされることになってしまった。しかも、超高速取引株主は、ある瞬間だけ株主だが、そのような人に基準日では株主だったとみなすことは妥当か、匿名株主の権利を認めるべきか、(英国では、実質株主(real owner)情報開示請求制度がある。)など、人間疎外拡大諸要素も現れている。
こうした状況を放置すると、資本による人間に対する歯止めのない支配の横行を許すことになってしまう。フランスのジャック・アタリ氏は、二〇三〇年には、国民の99%が激怒する社会がやってくると述べている。欧州は資本の自由な活動にかなり慎重だが、アメリカはこれを放置し、日本もそれに従う懸念がある。
株式会社における人間復活の論理をいかに構築するかが重要である。その場合、議決

権と配当請求権を分けて、前者は、人格権とし、後者は、財産権と考える発想がありうると考える。
近時の海外の動向はどれも人間を志向している。日本は、明治以来、各国の法制度を研究し、日本の実情に適合した法律を作った、いわば、比較法大国だ。今後、日本は経験「知」の不足を理論「知」で克服し、欧米が忘れていた論理を新しい発想で掘り起こし、途上国の期待にもっと応えるモデルを構築すべきだ。(文責 塚本弘)

久子他」のお話。日本が舞台となった『蝶々夫人』には「宮さん宮さん」、「お江戸日本橋」、「さくらさくら」等八曲の日本の歌が使われているが、それらは当時の駐伊公使大山綱介の久子夫人がプッチーニに紹介した。それらがどの様にオペラに取り込まれたかを、ピアノリストの植木さんに逐一弾いてもらいながら具体的に説明してくれた。日本が日露戦争に勝利したことでプッチーニの日本を見る目が変わり、初演で不評だった『蝶々夫人』から日本を蔑視するような場面を修正し、その結果、世界で上位五に入るオペラになった等々。
第二部ミニコンサートでは、メゾソプラノ伊達伸子、ソプラノ酒井えり子、同磯田直子のお三方が、『蝶々夫人』から『ある晴れた日に』や『花の二重唱』、そしてイタリア民謡『チリビリン』などを熱唱し、満席の会場はオペラハウスと化した。
第三部懇親会には、ほとんど全員が残り、『台風どっこ吹く風』と盛り上がったが、電車の動いている内に帰ろうと五時前に散会した。(岩崎洋三記)

i-café-
music&lecture
報告

担当 幹事
植木 園子

■九月八日 i-Cafe-music @ 四谷サロングァイヤール 「イタリア編」
夜半には台風上陸見込みと予報あり開催が危ぶまれたが、意外にも超満員になり、魅力的なお話とミニコンサートに盛り上がった。
第一部映像とお話では、DVD第八章「西洋文明の源流 イタリア」を見た後、音楽評論家萩谷由喜子さんの『明治の洋楽発展に寄与した女性たち』幸田姉妹、三浦環、大山

■十一月三日 i-Cafe@ゲルト・クナッパパーギャラリー(茨城県久慈郡大子町)
*報告は二・三頁に掲載

催し案内

2020年(令和2年)1月~3月

☆米欧回覧実記輪読会

一月八日(水)

第25巻『倫敦府ノ記 下』

(pp. 100-115) (富田兼任)

二月二日(水)

第26巻『里味陂府ノ記 上』

(pp. 116-134) (吉原重和)

〔時間〕13:10~14:50

〔会場〕日比谷図書文化館

〔会費〕会員600円(非会員800円)

☆フルベッキ輪読会

一月八日(水)

Ch. VIII The Revolution of 1868 (pp. 142-156)

(岩崎洋三)

二月二日(水)

Ch. IX Trip to Osaka (pp. 157-179)

(齊藤恵子)

〔時間〕15:00~17:00

〔会場〕日比谷図書文化館

〔会費〕会員600円(非会員800円)

☆歴史部会

一月二七日(月) 13:30~16:30

新「岩倉使節団の群像」

久米邦武(発表者:小野)

安場保和(発表者:芳野)

中山信彬(発表者:吉原)

野村靖(発表者:栗明)、内

海忠勝(発表者:小野)

〔場所〕日比谷図書文化館

二月二五日(火) 13:30~16:30

新「岩倉使節団の群像」

大蔵省:田中光顕(発表者:小野)

小野寺)、五辻安伸、阿部

潜、沖探三、池田政懋

〔場所〕日比谷図書文化館

☆グローバルジャパン研究会

二月一五日(土) 13:30~16:30

「憲法九条、昨日・今日・明日」

―憲法の制定過程、現在の問題点、今後の展開について

〔講師〕栗明純生氏(会員)

〔場所〕国際文化会館E

〔会費〕1,000円(会員)1,500円(非会員)

☆i:cafe-music@サロンガイ

ヤール四谷

二月一六日(日) 14:00~17:00

〔第一部 お話〕築地居留地―

讃美歌との出会―

〔講師〕

中島耕二氏

元明治学院大学客員教授、

築地居留地研究会理事、著書

「近代日本の外交と宣教師

(吉川弘文館)」他

〔第二部 ミニコンサート〕

♪Song for the Close of School(仰げば尊し)♪かやの

木山・ペチカ(山田耕作)他

(ツプラ)

森美智子・武藤弘子

〔第三部 交流会〕会費3,000

円(会員2,500円)ワイン、軽

食付

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この歴史的な大なる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会員 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回、全体例会があります。

部会 テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウム等を行っています。

機関紙 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局 「米欧亜回覧の会」事務局 近藤義彦 〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 1-1-5-707 E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp TEL 090-2658-1423

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。年会費などのお支払いは下記口座をご利用ください。

ゆうちょ銀行

振替口座(当座預金) 00180-0-635365 店番:019

総合口座(普通預金) 8804433 店番:018

三菱UFJ銀行 222-(普通)0544121

特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

歴史に学び、未来を考えませんか?

NPO法人米欧亜回覧の会 公式ホームページ

<http://www.iwakura-mission.gr.jp>

Facebook

Iwakura Mission Society 岩倉使節団・米欧亜回覧の会

編集後記

◇年号が平成であった一年前の年末年始は、グランドシンポジウムの記録がミネルヴァ書房から出版されたのに続いて、報告書出版(私家版)に追われていました。出版記念を兼ねた二月全体例会後は、次なる目標を三年後の使節団派遣一五〇周年記念事業と定め、企画の検討・議論が活動の中心となりました。このたび、記念事業に向けた大きなプロジェクトの一つとして「岩倉使節団の群像」の新シリーズが、一〇七名のデータベース構築を目指して一二月にスタートしました。

◇群像・新シリーズは歴史部会の活動であり、そのほか、実記輪読会やi:cafeの部会活動の発展形としての新しい展開や外部とのタイアップ企画も次々と具体化していきます。したがって、今号は、従来の特集・トピックス面(二・三頁)と部会活動報告面(四頁以降)のどちらに掲載するか迷う報告記事が多く存在することになりました。

◇また、これら従来にない新しい展開の殆どが一月・二月に具体化し、新年会や次の全体例会も未定で、編集は年内ですが令和二年の発行となりました。(N)